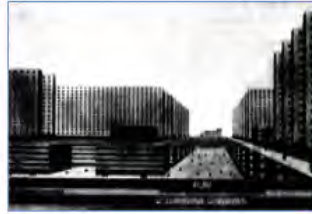


「一住宅一家族」の発明

では、現代のわれわれはどうかというと、こうした構造を持った住宅に住んではいません。現代のような、ひとつの住宅にひとつの家族が住むという住み方を、私は「一住宅一家族」システムと呼びたいと思っています。「大きな共同体」が崩壊し、住宅という「小さな共同体」が国家という枠組みに直接結び付けられているという住み方で



ルードヴィッヒ・ヒルペルザイマーが考案した「ハイライズシティ」（1924年）。

す。これはルードヴィッヒ・ヒルペルザイマーが1924年につくった「ハイライズシティ」という都市計画です。集合住宅の下部には商業施設があり、その建物の間を自動車が走り、ペデストリアンデッキの上を歩行者が行き交い、地下鉄が都市を繋いでいる。「ハイライズシティ」は、現代の私たちが住んでいる都市そのままの風景です。その最初のモデルだと言ってよいと思います。こういうものを目指して、私たちは都市をつくってきました。

このころから都市における住まい方が劇的に変わってきます。それ以前の都市は、たとえばウィーンやベルリンでは、田舎から出てきた労働者たちが、ほとんど雑魚寝のようなかたちで住んでいました。現在、私たちは「共同体内共同体」ではなくて「一住宅一家族」という住み方を当然だと思っていますが、これは1920年代に建築家たちによつて発明された住み方なのです。

当時、第一次世界大戦が終わって帝国主義国家が軒並み崩壊し、ひとつの民族にひとつの国家という形式がヨーロッパあるいはその周辺国でつくられていきました。建築家は「一家族一住宅」システムによる国民国家づくりをさまざまなかたちでサポートしていき、CIAMはまさにそれを担っていました。「最小限住宅」の会議が1929年、1933年には「アテネ憲章」が採択されました。

ル・コルビュジエも1922年に「300万人のための現代都市」という「一住宅一家族」システムをつくりました。私はル・コルビュジエもこのような都市のつくり方には実は相当疑問を持っていて、どうしたらコミュニティを形成しつつ「一住宅一家族」が閉鎖的にならないかということを考えていたと思います。それは必ずしも実現しませんでした。「ユニテ・ダピタシオン」にしても、ル・コルビュジエはさまざまなコミュニティ施設をつくらうとはしましたが、住宅は完全に閉じられています。



「300万人のための現代都市」ル・コルビュジエ（1922年）。

1955年に日本住宅公団ができて、「一住宅一家族」はそのまま日本に輸入されてきました。そして今や、すべての住宅が「一住宅一家族」になっています。つまり「一住宅一家族」は、1920年代のヨーロッパに始まり、現代の私たちの都市の風景にまで繋がっているわけです。

標準化された家族

国家が国民を管理するシステムとして、ご住宅一家族」は非常に好都合なシステムです。ひとつの住宅にひとつの家族が住むことによって、家族は標準化されていきます。隣も同じ家族構成、私も、上の人も同じような家族というように、すべての家族が標準化されていく。すると、国家が非常に管理しやすい社会ができ上がります。

中野隆生さんというフランス近代史の研究者が書いた『プラーク街の住民たち」^[注3]には興味深いことが書いてあります。

フランスで1848年に2月革命が起こり、その後のナポレオン三世の登場でパリは近代都市に生まれ変わっていきました。2月革命は「宴会革命」とも呼ばれていて、当時の市民は大勢の人びとが集まる場所で宴会のように反政府集会を開いていたそうです。2月革命は、その集会を禁止したことが発端です。

その後、どのように住宅をつくるべきかが問題となり、ふたつの案が考案されました。一方は各家庭をばらばらに住ませるご住宅一家族」の案。もう一方は住民を一カ所に集め、徹底的な管理の下に住ませるという案でした。プラーク街という労働者団地では「一住宅一家族」の集合住宅が建設されました。2月革命のような反政府運動が二度と起こらないように、労働者の住宅は「一住宅一家族」で相互にあまり接触のない住み方のものになりました。

こうした経緯を経て、都市に生活する人たちはそれぞれの家庭でばらばらに住むようになった、というのが中野さんの主張です。私は1920年代の建築家たちがこうした流れを決定的なものにしたと思います。男性は外で働き、女性は住宅の中で家事を任されるという形式も1920年代にほぼ完成していました。

「アテネ憲章」が採択された1933年はナチスが政権を獲つた年でもありません。ナチスは当時「優生法」という法律をつくり、劣性遺伝子を持っているとされた人たちが子どもを産めないようにしていました。劣性遺伝子を排除することで、国民を標準化することが目的でした。ナチスだけでなくこのころのアメリカやヨーロッパのいくつかの国も同様の政策を取っていました。

「一住宅一家族」住宅の発明、劣性遺伝子の排除は、家族の標準化という同じ理念のふたつの側面です。

「地域社会圏」という考え方

山本理顕 RIKEN YAMAMOTO

<< 前のページへ

一番最初のページへ

次のページへ >>

閉じられた住宅

普段あまり意識していませんが、私たちはこういうことを前提にして住宅に住んでいるし、建築家はこういうことを前提にした住宅を設計しています。私はこれはかなりすごいことだと思います。私たちはそれまでの「共同体内共同体」的な住み方に比べて、まったく異なる住み方を選んだのだと思います。

先ほどご覧いただいた集落の写真をふまえて、ひとつの住宅にひとつの家族が住むということがいかに特殊なことであるかを皆さんに考えていただきたい。私たちの住宅はきわめて閉鎖的につくられています。「共同体内共同体」においては、地域共同体が住宅を外から包んでいましたが、「一住宅一家族」システムではその地域共同体が消滅してしまったので、住宅は単独で孤立的にならざるを得ません。それでマンション、住宅はその出入口を鉄の扉で閉じ、外側とできるだけ関係なく住めるようになっていったのです。隣あった住宅は相互に干渉しません。高級なマンションほど隣の音が聞こえないようにできていて、隣の音が聞こえたりすると事件が起こってしまったりするわけです。

こういう所に私たちが住んでいると思うと恐ろしくはないですか。私はやはり変な住み方をしていると思います。

私たちの意識は

「一住宅一家族」はひとつのパッケージ商品としてかなり完成度の高い商品です。玄関のドアをガチャンと閉めてしまえば、住宅は完全にプライバシーの守られた場所になります。1970年代から住宅はマンションというかたちでパッケージ商品として売られ、住戸の内側だけが商品になっていきました。それは戸建ての住宅でも同じです。敷地の内側だけを購入しているという意識が強くて、周辺的环境に対してほとんど無自覚になっています。環境や景観と無関係に住むということは、非常に不幸なことです。2001年に不動産証券化が運用されて以降、住宅は住む人のためではなく、投資家の投資意欲を刺激するようにつくられています。超高層のマンションが証券化されて、投資家のためにつくられます。それがディベロッパーの資金になるわけですよね。彼らはそのマンションについてどれだけ利潤が多いかということしか考えていない。そこに住む人のことはほとんど考えられていません。

このような住宅のつくり方の中では、景観に対する意識はほとんど失われています。東京はまさにそういう都市になっています。建築の内側だけが私たちの住む場所であるという考え方であり、建築家もそのような住宅をつくってきた結果、現在のような風景ができています。

でも私はこのようなシステムは破綻すると思います。

日本は2015年には四人に一人が65歳以上になります。2025年には生産年齢人口の二人が一人の高齢者を支えるようになるそうです。合計特殊出生率は今は約1.37です。二人の親から2.1人の子どもが生まれると、現在の人口が維持できます。それに対して1.37人しか生まれていません。

2005年の東京の世帯人員は一人住まいが全体の42.5%です。単純に言えば一人住まいが一番多い。これはとても恐ろしいことです。標準家族のための住宅を供給していたはずが、現在はそこに一人で住んでいるのです。こうした状況で「一住宅一家族」を本当にこれからも続けていってよいものなのでしょうか。

社会を「S」、「M」、「L」という三つのスケールを持った集団として考えたします。「S」集団は最小単位の家族集団、「M」集団は地域社会、「L」集団は国家によって管理される単位です。すると現在の私たちに「M」がありません。「S」集団の標準化が不完全になった現在では、「S」と「L」だけの社会で生活していくのは無理だと思います。

現在「S」集団には家族しかあてはまらないでしょう。しかし一人で住んでいることを家族と言えるのでしょうか。あるいは老夫婦だけで暮らしているのを家族と言えるのでしょうか。家族は多様化していると言いつつ、みんな相変わらず家族を装っているではありませんか。一人であろうと、二人であろうと、家族のフリをしないと「S」にならない。どんなかたちの家庭も標準的な家族を演じながら住まなければならない。それはあまりにも個人個人に負担がかりすぎです。

「S」集団のかたちは家族以外にもさまざまに考えられるのだと思います。「M」集団も同様です。建築家にはそういうものを考える想像力が必要です。もし「S」と「M」という集団があることを前提にして地域の運営を考えていけば、現状とはかなり違う社会になっていくのではないのでしょうか。それが「地域社会圏」について考えていくことなのだと思いますし、住宅のひとつひとつをつくる時にも考えるべきではないかと思えます。